◆基調講演２

「アジアの見方、係り方」

神長善次

前外務省大阪特命全権大使

（司会）

引き続きまして神長前外務省の大阪特命全権大使から「アジアの見方、係わり方」と題しまして基調講演をお願いしたいと思います。

神長前大使は、京都大学をご卒業の後に、外務省に入省されました。その後、外務省の文化第２課長、中近東第１課長、それからジュネーブ国際機関の日本政府代表部、あるいはインド日本大使館、インドネシア日本大使館の公使を勤めておられます。その後、オマーンの日本大使館、あるいはネパールの日本大使館の大使も勤められています。今年１０月まで外務省大阪特命全権大使を勤められておりました。それでは、よろしくお願いいたします。

ただいまご紹介を受けました神長でございます。

まずは、ＰＲＥＸ１５周年、心よりお慶び申し上げます。

さて、演題の「アジアの見方、係り方」ですが、先ほど井上会長のお話を聞いていまして、思い出したことがあります。実は、日本とアジア、この付き合いなんですが、ＡＳＥＡＮができたのは１９６７年です。このＡＳＥＡＮと日本がお付き合いを開始したのは、恐らく７０年代からだと思います。その当時、私は通産省に出向していまして、アジア全体を見る組織に所属しておりました。その時にＡＳＥＡＮとの対話の場がないということが、わかったんです。それで、今も活躍されていますが篠原三代平先生を団長として、私どもがＡＳＥＡＮを訪問いたしました。その結果、いま東京の浜松町にありますが、アジア経済人クラブというものをつくったわけです。７４年だったと思いますので、３０年を経ているわけです。

しかし、そんな話をＡＳＥＡＮとの関係が拡大された今お話ししますと、何だ、そんな小さなものという感じがいたします。しかし、３０年前の日本とアジアというものは、そんなか細いも

のでした。そしてその間に、ＰＲＥＸが１５年前にできた。しかもＰＲＥＸは堂々と、このように発展し、すばらしい実績を残しておられる。私はほんとうに、今日ここへ来てよかったなという感銘を覚えています。３０年前と１５年前、そして今のアジアとの交流の流れを感じとっている次第です。

それと関西。私も大学は関西ですが、つい先月まで大阪大使をさせていただいていまして、この４０年間、もう何度となく関西を見ております。そして、やはり関西がアジアの窓口だということを実感として、わかってまいりました。

例えば先ほど、井上会長から関西経済同友会の話がありましたが、あれは確か１９８３年だったと思いますが、関西経済同友会がＡＳＥＡＮにミッションを出されました。私はその時、フィリピンにいたんですが、フィリピンにも来られまして、大統領を初め、いろんな方にお会いになって、お帰りになられました。その結果、何が出たか。文化を見ようという提言が出たんです。その頃まで日本の経済界は、文化というのをあまり自分たちがやっていくという目で見ていなかったと思います。その先鞭をつけたのが、この関西経済同友会のミッションだと私は確信を持ってみてきているんですが、実はその時のリーダーが、茶谷さんだったと記憶しています。そして、それにつづいて井上さんがおられたということです。そういう意味でも井上さんが会長になられて、このＰＲＥＸを引っ張っておられることを２重の意味ですばらしいことだなと思っているわけであります。先ほど来、ＰＲＥＸが発展してきた姿をＤＶＤで見ることができて、ほんとうにそのすばらしさを実感を持って、逞しいものだというふうに思い眺めておりました。

さて、今日は「アジアの見方、アジアとの係わり方」、というテーマになっています。話せば長くなりますが、私はアジアには、かなり関与しておりまして、通産省に出向していた頃から数えて、もう３０年以上関っています。私自身もフィリピン、インドネシア、インド、ネパール、それに、オリンピックでいえばアジアに入るオマーンですが、そういうところに赴任いたしました。宗教的にはキリスト教の国、イスラムの国、ヒンズーの国、そしてチベット系ですが、仏教の国を見て来まして、アジアというものの姿をバランスよく見てきた感じがします。これからその経験に基づくアジア観を皆様にご披露して、問題提起をしたいと思っています。

まず、このアジアですが、私は２つの観点からお話をしたいと思います。

１つは多様性ということです。多様性ということで３つ申し上げます。もう１つは集約性ということであります。集約性ということからも、３つの点を申し上げたいと思います。

まず、アジアの多様性。その前にアジアの範囲ですが、恐らく今のわれわれの概念にあるアジアというのは、南アジアから東のアジアというふうに思いますので、その国々を考えていただきたいと思います。すなわちパキスタンから北東は日本、南東はインドネシアまで。この間に２３の国がありますが、こういう国々を念頭に入れて、考えていきたいと思います。

多様性の内容の第１番は、何と言っても、文化、言語の多様性だと思います。２３ヶ国のうち言語を共通している国というのは、２、３しかありません。他はそれぞれが自分の言葉を持って

います。今日来ておられますフィリピンの代表の方、タガログ語、もちろんありますし、タイはもちろんタイ語がありますし、私のいたネパールはネパール語です。あの小さなブータンでさえ、ゾンカ語を持っています。ほんとうにすべての国が持っているという、これはすごいことなんですね。例えば、アラブ２２カ国、アラビア語で通じます。あるいは南米、北米を考えていただければ、スペイン語と英語で通じますね。そういうことを考えると、このアジアの多様性、言語ひとつを取ってもすごい。

なぜ言語か。言語は、実は私どもの思想、意識、存在、そういうものを考える基礎になるものだからです。すなわち文明の元になるということです。そういう意味で、この言語の多様性は重要な意味を有しています。それを現す文字もそうですね。これも各国が持っている。これも今申し上げた他の地域と比較されればお分かりになることであります。

それから政治形態も多様であります。共和制の国が１４あります。王制の国が６つあります。軍制の国が１つあります。そして議会制民主主義といったらいいんでしょうか、日本とインドがあります。共和制と言っても、選挙をするところもあるし、しないところもある。した後で、直接、大統領を選出するところもありますし、間接のところもあります。この共和制１つを取っても、多様な地域であります。このことも例えば、ヨーロッパと比較されると、すぐお分かりになると思います。いかに多様であるかということであります。

２番目、これは文明であります。サミュエル・ハンチントンが有名な「文明の衝突」という本を書いておりますが、あの中で、言っているのは、８つ程の文明圏です。それは宗教主体。ヨーロッパの場合、宗教主体に文明を考えますから、そうなるんですが、キリスト、イスラム、ヒンズー、仏教、それからロシア正教を入れています。これで５つですね。それと中国文明圏。それに日本だけを取り出して、一つの固有な文明圏。８つ目はラテン・アメリカというように言っております。すなわち８つのうちの６つが、アジアに存在しているということであります。つまり宗教性のものは、ロシア正教を除いてすべてアジアにありますね、それと中国と日本の文明圏、これがこのアジアを形どっている文明圏であります。問題は、その文明と文明の間にハンチントンは断層線ということを言っていますが、それがあるということですね。ただ、この断層線を強調しますとナショナリズムに偏向してしまう危険性があります。従って本日の、おそらく後でパネル・ディスカッションの対象になるでしょうけれど、そういうナショナリズムに偏向せずに、文化圏の中でどういう対話ができるのか、解決が生まれるのか、これがわれわれに課せられた問題だろうと思います。

それから文明の多様性というのは、先ほどカセム先生の話にもありましたが、この多様性がいろいろの文化、文明をさらに生んでいくという、このすごさですね。それをアジアが秘めているということでもあります。すなわち、この多様な文明というのは、豊かな芸術的、あるいは技術的、あるいは知的創造性の元であるということであります。カセム先生は、モノづくり、そして潜在性というものを引き出して、その結晶としてのデザインというものがあると言われましたが、私もまったく同感であります。実は私は、今日アジアの多様性を知っていただきたいと思って、

服を着てきました。シャツはインドネシアのバテックです。チョッキは、ヒマラヤの高地でできるヒツジやヤギからつくった毛の毛織物です。そして服ですが、これは生地はヨーロッパから来ているんですが、つくったのはオマーンでして、しかも、これをつくったのはインド人です。テーラーですね。そして、服のデザインですが、これは日本のデザインなんです。私が持っていった日本のデザインを、コピーさせたということであります。すなわち、着物ひとつとっても、それぞれアジアの創造性というのが込められているということであります。今日、タイから文化省の副大臣が見えておられますが、タイ・ネクタイといえば、有名な話ですが、私のいましたネパールでも、すばらしいデザインのネクタイがあります。

その他にも、マンダラ的な、あの神秘の世界ですね。そういうものをデザインする力がアジアにはあります。それから今、デジタルの時代ですが、このデジタルも、実は陰陽道から来ているんですね。陰と陽に分かれて、そしてプラス、マイナスと、１、０ということでやるんですが、これは実は、その考えをドイツ人のライプニッツが理論化したということで、元を正せば、アジアの思考にたどり着きます。事ほど、左様であります。インドの１０進法、あるいはゼロの発見というのも、その１つとして考えていいでしょう。とにかくインドへ行っても、ネパールへ行っても、インドネシアへ行っても、タイへ行っても、どこへ行っても、その文化、文明のすごさを目のあたりにするわけです。

アジアの３つ目の多様性、これは大陸性と海洋性を中心とするもの。これはマッキンダーという地政学者がいますが、彼がオックスフォード大学で教えた時に、つくった理論ですね。それに加えて、私はアジアの場合は、ヒンズー性というのを入れるべきではないかと思っております。大陸性、海洋性、これを説明すると長いんですが、端的に言えば、大陸というのは、どちらかというと、隣国と接していますから、非常に政治的、覇権的、あるいは防衛的、そういう要素が非常に強いということですね。海洋性、これは貿易をしないと生きていけませんから、どうしても経済が先になります。そして信頼を勝ち取ること、そういうことが先になりますね。地政学について、マッキンダーがおもしろいことを言っていまして、１つの国が、大陸性の大国であっても、同時に海洋性の大国になることはありえないと。これが歴史の教えるところだと、こう言っています。

地政学に入るかどうか判りませんが、アジアに関してはヒンズー性というものを加えるべきだと私は思っています。なぜかと言いますと、インドネシアへ行かれたら、ご存知だと思いますが、バリにはヒンズーが、まだ、残っています。そして、カンボジアのアンコールトムも、そうですね。アンコールワットは、とくにヒンズーの世界ですね。この例が示すようにアジアにはヒンズーの考え、見方が非常に根深く残っているんです。日本の桃太郎伝説も、おそらく、元をたどればインドのラーマーヤナ物語にいき着くと思います。ということで、このヒンズー性というものを、われわれは度外視できない。なぜかというと、ヒンズーというのは、大陸性や海洋性という見方ではくくれないんです。例えば、覇権性を求めないんですね。求めたとしても、それを本丸に据えない。そういうところがあります。それじゃあ、海洋性的に貿易中心だけでいくのかとい

うと、そうではないですね。非常に合従連衡、いろんなことを考えます。そういうことがありまして、私はヒンズー性をアジアの地政学的多様性の１つに入れるべきではないかというふうに思います。

大陸、海洋性の考えの違いの一例をあげたいと思います。日経新聞に、中国文学の第１人者の興膳先生が書いておられましたが、「天高く馬肥ゆる秋」ということばがあります。われわれは、これは秋になって、食事がおいしくなって、太るから、注意しようというふうにとりますが、先生の説明では、中国では、秋高く馬肥ゆるというのは、実は秋になると、馬が肥えて、異民族が北から入って来るから注意しろ、国境を守れという意味なんだそうです。私は先日、ある大学で教えた時に、中国人がいまして、そのことを話したら、ほんとうにその通りだと言っていました。これは実に大陸的な見方ですね。

それではこの多様性を進めていったら、アジアは一体どうなるか。これは問題提起ですが、文明圏を一緒にするものが合従連衡して、文明圏の間でブロックの競い合いになるのか、そういう考え方も出てくるだろうと思います。待てよ、冷戦は終ったはずだ、だけどヨーロッパの冷戦の氷解と、今のアジアの氷解は、違うのではないか。社会主義は崩壊しているのか、いないのか。その問題があるのではないか。こういうこともあると思います。従って、アジアの多様性が投げかける問題、これはわれわれが真剣に２１世紀を生きていく上で、考えなければならない問題だということを指摘したいと思います。

次に、アジアのもう１つの特性として、連携性といいますか、集合性の話をさせていただきます。実は先ほどのＤＶＤに、インドネシアの経済界の第一人者であるワナンディさんが映っていて、なつかしいなと思いました。私がインドネシアにいる時に、ずいぶん、お付き合いをしたことがある方です。１０年前のあの頃、恐らくワナンディさんも、そう思っていたと思うんです。アジアでこれだけ域内貿易が活発化するということが、念頭にあったかどうかですね。つまり、今もＡＳＥＡＮの域内の貿易は、２５％を切っております。２３％ぐらいです。しかし、「ＡＳＥＡＮ＋３」ですね。１４日からクワラルンプールで小泉首相も出席してその会議が開かれますが、このＡＳＥＡＮ＋３の間の域内貿易は、なんと５３％です。つまり、このＡＳＥＡＮ＋３が行っている全世界貿易の半分以上は、自分たちの中でやっているんですね。こういう時代になってきました。これは私がインドネシアにいたあの当時（その前にインドにいたんですが）、そんなことは考えられなかったですね。１５年でこれだけ変わってきたんです。アジアの急成長。世界の富、ＤＧＰは３１兆ドルあると言われています。そのうちの２３％が今やＡＳＥＡＮ＋３の国々が占めています。ＥＵが２５％です。そして北アメリカが３５％、こういう比率ですね。富みの蓄積も急激に増えています。投資もそうですね。世界の投資の２７％が、このアジアに集中しています。こういう時代、つまりアジアの連携性、集合性が非常に急速に進んできたというのが第１点です。

第２点として、その連携性は、なぜ進んだのか。確かに、私がアジアにおりました１０年ほど

前は、貿易形態でいいますと、垂直貿易、水平貿易の頃ですね。垂直貿易というのは、工業品を輸出して、農産品を入れるという、こういう方式ですね。水平貿易というのは、例えば同じエレクトロニクスの部品を出して、組み立てて、輸入する。そういう行き方ですね。でも、今は違いますね。今の学者は、これを生産工程プロセスの時代と言っています。日本からは、ＩＴでデザインなり、なんなりを打ち込んで、そして部品を輸出して、インドネシアにつくらせて、それをタイで組み立てて、アメリカ、ヨーロッパに売る。その生産工程が意のままにできる。こういう時代ですね。つまり貿易形態が違ってきたということであります。

それから第３点は、よく言われることですが、ＩＴ、情報化、そして金融のグローバライゼーションというのが急速に発展して、それがアジア各国間の連携を強めているということであります。これは恐らく、私から詳細に説明する必要はないんだろうと思います。

集合性あるいは連携性ということで、３つの指摘をした上で、今後の問題点は何かといえば、ではアジアは、共同体化できるのか、ということになろうかと思います。これにも先ほどのアジアの多様性ということが、１つ考えに入って来なければなりません。ところで私は、アメリカでは沖縄返還、そして日米貿易交渉のはしりの時に、ワシントンにいまして、その後７０年代の後半の頃でしたが、ヨーロッパへ行った時は、ヨーロッパとの貿易戦争のやはりはしりの時でありました。そこでヨーロッパの共同体の姿をじっくりと見てきましたけれど、ヨーロッパの共同体化と、今のアジアとは比較にならない点がありますね。ヨーロッパがやった時代は、重厚長大工業の時代です。つまり、重厚な産業とおカネと国家間の集中力と法制度とすべてを統合していかないとなんともならない時代ですね。従って遅々とした歩みの中で、今のヨーロッパに進んできたわけですが、アジアの場合、先ほど言いましたように、決済ひとつとっても、ほんとうにＥメールをして、数秒後にはおカネになるという時代ですから、その時代性が違っているということが言えると思います。

それから先ほど言いました多様性です。しかし、集約性が、ここまで進んで来ますと、われわれは、それ故に多様性の問題を乗り越えなければならない時代に突入しています。恐らくそこで一番必要なのは、制度化だと思います。これをしっかりとつくっていく。これが、これからのアジアの基礎になると思います。１つは、やはり、ＦＴＡですね、フリー・トレード・アグリメント。こういうものを通じて、しっかりと積み重ねの集合性、これを制度化していくということであります。次に、私は期待しないところの問題と言っているんですが、例えば先ほど、カセム先生の話にもありましたが、スマトラ沖地震、これでアジアが、助け合いますね。何とかしようと。前回のソウルでのサミット、あの時も、そうですね。ＡＰＥＣ、これはアジア、太平洋ですが、鳥インフルエンザ、こういう予期せぬ問題が、実はアジアをまとめていく可能性があるということも、われわれは頭に入れておく必要があるんではないかと思うわけです。実質的な共同体化の話はその後になる性格のものでしょう。以上で、アジアの見方という問題整理を終ります。

次に日本の特質、これは皆さん、日常のことでお考えでありますから、私は項目だけを申し上げれば、ああ、あれかということだろうと思いますので、項目だけを申し上げます。まず政治性。日本の政治性の一大特徴は、やはり、ほんとうに長い２０００年とも言われる天皇制という象徴と、執行機関としての行政のチェック・アンド・バランス。この制度があるというのは、すごいことだと思います。それから議会制民主主義、これはアジア最古ですね。インドは、人口からいって世界最大の民主主義国家であります。このすごさ。私はネパールにいましたが、いまネパールは、未熟な民主主義の下で政治不安定で、ゆらめいております。こういう時、日本の１００年の議会制民主主義の歩みからネパールが学ぶことはないのか。また、日本が教えてやるものがあるのかどうか。そういうことを真剣に考えざるを得なかったわけでありますが、これはやはり、われわれ日本人として、しっかりと身につけていくべきことだと思います。

それから国際関係における平等主義。聖徳太子の「日の出づるところの天子、書を日の没するところの天子に致す、つつがなきや……」の、あの時からの他の国家に対する平等思想です。これはその後も連綿とつづいているということであります。

それに文化、文明性の分野で、仏教と神道が、これは２者融合という形、すなわち神仏集合ということで、信じられているという事実。これは実は、世界的にたいへんなことなんです。例えばキリスト教にしても、カトリックとロシア正教の合わさるところ、つまり、東ヨーロッパの、さらに東のところは、いまだに文明上の断層があって、その境の線が実はＥＵの東の境界ではないかと言われています。キリスト教圏の内部でも数限りない宗教戦争が行われていますが、それらと宗教戦争の少なかった神仏融合の日本を比較してみるとお分かりになることと思います。

神仏融合が日本で成った理由は、いろいろとあると思います。私はその一番根本のところにあるのは、神道にしても仏教にしてもやはり生命力、それを根本としているところにあるのではないかと思います。それから２者を択一するのではなくて２者を融合してしまう日本独自の思想ですね。日本人は、２者択一よりも、むしろ、２者の良し悪しを精査して中道を選ぶ傾向があります。あるいは融合を選ぶ、２者融合、これはやはり避けて通れない日本人の特性だと思います。こういうことがあるから世界から文化を入れそれを消化して、自分のモノにして、そして輸出していく。

３つめは、重層文化、そして、そこから出て来るところの、文化の洗練性ですね。今年３月、シラク大統領がこの大阪へ来られて講演されました。その時にシラク大統領が、なぜ自分は、日本をほめるのか、という理由のひとつに、この文化の洗練性ということを言っておられます。恐らく、それは重層文化、積み重ねてきた文化ですね。関西だけでも奈良、難波、京都、長岡、滋賀の文化。それらが重積して、さらに洗練された文化をつくるということではないでしょうか。

今度は経済、あるいは風土性という点から申し上げます。やはり３つほどです。先ほど申し上げましたが、海洋性国家と、資源のなさ、そして貿易で生きていくために技術を磨き、そしてまた、教育というものによって、知的レベルを上げて、洗練されたモノをつくっていくという、この日本の風土性です。

次にモンスーン気候と自然、緑の恵み。アジアをまわってきますと、モンスーン・ベルト地帯というものに感謝したくなります。ちょうどネパールの中央辺りから、日本までモンスーン、この気候帯があります。もちろんフィリピンもタイもそうです。モンスーン・ベルト地帯によって生み出される緑の風土、この素晴らしいもの。これがやはり日本とアジアというものの共通性、これをつくっているなという感じがしてなりません。日本の場合、とくに地震、その他の災害が多いですから治水、治山、これも進んでおりまして、そういう意味では、この自然を守る、自然との共生をどうするか、あるいはエコマインドというものが、こういうところから出てくるのではないかという感じがするわけであります。

経済風土の分野で、もうひとつ申し上げるとすれば、私はやはり日本の戦後の貢献の大きなものとして、経済協力をいろんな分野で実施してきたことだと思います。特にアジアに対して、かなりの貢献になっております。例えば、フィリピンの南北の道路。インドネシアの１４，０００の島を結ぶインフラの整備。無償援助では、例えばネパールでいま１万の教室をつくろうとしています。万人の教育と言っていますが、１万の教室をつくる。これはやはり日本が行なってきたすばらしい実績ではないかと思うわけであります。

さて、今日の本題であります「関西とアジア、人材交流を通じたアジアとのつき合い方」に入ります。これは後のパネル・ディスカッションで討議されると思いますので簡単に申し上げます。関西はいうまでもなく日本の特性から言いますと、日本の文化、文明をリードしてきました。東大寺の頃からインド、ベトナムとの関係がありました。そういうお付き合いをしております。そして遣唐使、まさにこの灘波から遣唐使が出て行きましたし、四天王寺へ行けば、初転法輪の輪がありますね。あれを見ると、インドのサルナートの初転法輪を思い出します。今日は、まさに仏陀が悟りを開いた日ですね、１２月８日。そういう意味では、ほんとうに日本の仏教の発祥の地に初転法輪の四天王寺があるということは、象徴的であります。そして四天王寺といえば四天王寺ワッソがありますが、半島の文化、文明を入れてまいりました。また、堺を中心とするあの文明、文化の蓄積、外国との知識・技術の吸収、こういうものがありました。戦前戦後を思えば、この大阪の繊維産業、これは恐らくアジアを抜きにしてできなかったでありましょう。そしてそこから生まれてくる神戸のインド人街であるとか、そういうもの。人々の集まるところができて、世界のセンターになっていくということであります。

本日、この大阪に来るにあたって、私は大阪にいる時から考えていたんですが、やはり、大阪、関西は新基軸を打ち立てる必要があると思います。後でディスカッションの時に質問があるかと思いますので、出だしだけを申し上げますと、第１にＩＴ産業ですね。これは言うまでもありません。先ほど言いました、あれだけすごい文明圏を持っているアジア、これはＩＴの宝庫です。それとのお付き合い、これは関西も、これだけの文化、文明、歴史を持っているわけですね。それはやはり、素晴らしいものが出てくると思います。

第２点目、バイオ。実は私はオマーンという国におりました。砂漠の国だから何もないかとい

うと、とんでもないですね。もう、そろそろオマーンからのインゲン豆が輸出されてきます。１２月から１月、２月にかけて、日本のマーケットの８０％を占める輸出をしています。オマーン産の緑のインゲン豆です。つまり、もう砂漠は、砂漠ではないんです。バイオが、それを緑にしているんです。そして海水は、淡水に簡単になるんです。使えるんです。そういう時代ですね。私はネパールにもいました。ネパールのバイオの実態は大変なものです。なぜか。ネパールの地は海抜５０メートルから８，０００メートルまであるんです。しかも、熱帯、亜熱帯の地域があり、高山上はもう寒帯です。ということは、ありとあらゆる植物が育てられるということです。でもこれは、残念ながら利用はされていません。ちょっと考えただけでもそういう事実と可能性があるということです。

第３は、生化学、あるいは医療科学の分野です。この分野では関西では特に神戸が中心になってやっていますから、私が説明するまでもないと思います。

第４は、新たな繊維産業。先ほど私の服装のことを言いました。アジアのデザイン性、これはすごいですね。そういうものを、これからじっくりと見極めて行く必要があるんではないでしょうか。つまり文化の方向としてのアジア、ＡＳＥＡＮ、これをいかに関西が活用できるのかという問題だろうと思います。

それから５つ目がカセム先生がいらっしゃいますが、建築デザインですね。シンガポール、マレーシア、上海、ドバイ。すごい建築ラッシュですね。このデザイン性、これは誰が決めるんでしょう。その問題があると思います。つまり市場としてのアジアがある。あるいはアジア、例えば私のいたネパールでも、すごい建築の歴史を持っています。日本にも二人ですか、建築学の先生にネパール人がいます。それくらいの力を持っていますね。

６つ目は、金融資本の新たな活用です。今日の新聞に出ていましたが、サウジアラビアの今年の石油輸出額は去年より５００億ドル増えたということですね。今、そのおカネは、どこへ行っているでしょう。恐らくヨーロッパを通じて、アメリカ、あるいはヨーロッパへ行っているんではないでしょうか。私がいたオマーンで、オマーン人が、よく言っていたことは、われわれは、これから安定の投資をしたい。つまり円にも興味があるということです。だけどその円を使っている日本、どうでしょうか。アラブといった新資本圏をうまく利用しようとしているでしょうか。この日本の先端を行く関西、じっくりと考えていただきたいと思います。

７番目、これは私が言うまでもありません。観光産業ですね。これは大阪府知事も、京都府知事も、あるいは兵庫県知事も、関西は一体となってやるということを言っておられます。この重要性は、まさに３知事の言っておられる通りです。例えば、水の少ないアラブを考えた場合、琵琶湖というのは、これは魅力的な資源ですね。あそこに別荘をつくらせたら、彼らの夢がかなうのではないでしょうか。コーランをお読みになった方がいらっしゃるでしょうか？天国というと必ず小川が流れていますね。そういうことも１つの夢になるんではないでしょうか。

８番目。先ほどカセム先生が問題提起をされましたが、大学ですね。この大学間の共同研究、あるいは大学間の姉妹関係と言いますか、やはり、これからのアジア、先ほど言いましたように、

安定なくして、このアジアはないですね。戦争をやったら、アジアの繁栄などというものは、あっという間になくなります。これを保っていく。若者を大切にする。そして世界の智のスタンダードを、どう築き上げていくか。そこに日本の智恵を、あるいは心血を注いでいく。これが重要なことだと思います。

そして９番目は、ＮＧＯ、ＮＰＯの活動を推進することです。ＰＲＥＸは、その代表です。ネパールでも、一昨年ですが、世界で一番高いところに鉄橋をつくるといって、実現した日本のＮＧＯがいます。しかし、４，０００メートルを越えるところまで鉄骨は運べません。ロバでは、とても運べないですね。そこで大使館がお世話いたしましたが、結局、ヘリコプターで運びました。この様に、ＮＧＯ、ＮＰＯは一生懸命にやっておられます。関西の建築士の方々が、やはりネパールの２，０００～３，０００メートルの山奥の高地に学校をつくっておられます。しかし、そこまで機材を運ぶとなると費用面でも大変です。この様な場合、政府、行政が一緒になってやれば、いろんなことができるということではないでしょうか。

１０番目、これは日本の問題でもありますが、とくに関西の問題として、十分にお考えいただきたいと思うのは、国際機関等の誘致ですね。国際機関ができるということは、波及効果がすごいことです。これができることによって、ホテルができ、インフラが発達し、銀行ができるというように広がりもってきます。スイスのジュネーブがそうです。私も３年程そこに滞在していましたが、スイスの発展の原動力の１つは間違いなくジュネーブに国連諸機関あるということだと実感しました。

まとめを申し上げますと、こうして、いろいろなことを新基軸として、ぜひ関西でやっていただきたいと思っています。関西を１つの単位として。私は今、日本で一番大切なのは、日本の文化と郷土の文化、地域の文化、それを私なりに「里の文化」と言っていますが、これを活性化することだと思います。そして活性化するに当っては、やはりＰＲＥＸのような存在が大変大事です。自らＮＰＯでありながら、しかし、政府も、地方自治体も、ＮＧＯも巻き込んで進んでいく。これが､実はこれからの日本に課せられた重要な課題だと思います。ぜひＰＲＥＸが、その意味において、成功されることを祈ってやまない次第であります。ご静聴、ありがとうございました。